

T 02
N 69
40

日本における統計学の発展

第 40 卷

話し手 柴 田 銀 次 郎

校閲者 野 村 良 樹



1977年10月29日(土)

10/12
26028

ま え が き

1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀨信邦*、森博美*、山元周行 (* 推進係)

2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。そのの方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

〔自著『外国貿易統計論』(叢文閣、1938年)についての話の途中から〕

—— 昭和13年に出ているんです。

—— いま古本で買おうと思っても買えません。

柴田 古本があれば、私買いますわ。

—— 信頼性と正確性の問題がここに出ているんです。誤差の問題で非常に感銘を受けたのです。

—— 貿易統計の発表が禁止になりましたのはいつなんだろうかということなんですが。

柴田 禁止じゃなくて、発表しなくなっただけです。

—— 昭和17年ごろでしょうか。昭和16年に貿易統制令というのが出ておりまして、その前に、軍用資源秘密保護法というのが14年に出ているんです。18年ぐらいですか、発表しなくなっただけというのは。

柴田 とにかく貿易統計の数字は全部税関ですから、税関統計なんです。通産省、もとの農商務省なんていうところから出してませんし、経済企画庁みたいなものもありませんし、それから正金銀行、いまの東京銀行は為替銀行で、統計を外貨の関係でとっていましたが、それはごく一部で、全面的なものは税関統計なんです。

その全国的なものを、大蔵省の関税局で編集しまして、数字に間違いがあってはいけませんので、統計の方の審査を経て、毎月発表しておったんです。発表の仕方は、大体商工会議所を通じるというのが第1次です。商工会議所から各新聞社があれを得たという形ですね。

—— 「日本国勢図会」というのが、昭和18年まで出ておりましたですね。

—— それまでの「国勢図会」、たしかそうだと思いますけれども、ちょっと忘れました。それには貿易統計のごく簡単な数字は出ておったように思いますけれども、詳しいやつは……。

柴田 真の自由経済というのは昭和10年まで。それが、本当にすみっこからチクリチクリと、軍需品ですか、そういうものに関する統制が行われてき始めたんです。

—— 朝鮮、満州関係のやつは、少し遅くまで発表されていますか。

柴田 そうです。これはずっと後に書いたんですが、「統計の欺瞞」というんです。「欺瞞」という書き方がいいかどうかわかりませんが、支那事変が始まりましたからの中国統計の欺瞞、それから、アメリカの統計の欺瞞、これが終戦後、審査に引っかかっちゃったんですよ。アメリカのことが書いてあるから。

これはずっと後で話すはずだったんですが、話のついでにいいますと、中国の数字は、農産物なんかまでが非常に膨大な数字なんです。実はそれが欺瞞だということで、ほかの資料の作付面積から割り出してみても、こんなものは日本でどんな肥料を施してみてもできないということの証明をやったんです。

その中で問題になったのが次の一節です。

「1929年10月のアメリカ恐慌のそもそもの原因を思い出さずにはいられない。私は恐慌直前に、アメリカ1年の滞在を終わってドイツに渡ったのであるが、この暗黒日の秘められたる直接の発生動機が、ドイツのベルリナ・ターゲブラットに報道されて、世人を啞然たらしめたのである。それは、当時の大統領フーバーは、

農産物価格が底知れず低落し、株価がこれとは逆に奔騰しているのを見て、これが恐慌の導因となることを察して、物価統計と株価統計との発表を見合わせるよう、統計当事者に指令したのであるが、この指令を漏れ聞いた株界の一角がたちまちに大動揺を来して、10月29日の株式大恐慌となり、ニューヨーク取引所に関するだけで、その日1日で40億ドルの損失を招くに至ったというのである。当時、私が師事していたハンブルク大学のチスカ教授は、この事実を察して、統計隠蔽のカタストロフィーと称していたことを記録している。このことはすでに当時、アメリカ政府に統計欺瞞の下地があったことを暗示するものであり、いまどきの重なる戦敗に関して、支離滅裂の発表を行っていることも、あながち戦敗の苦しまぎれからばかりでないことを知るのである。

これは中国の統計ですが、これが引、かか、ちゃ、のです。

ところがよく読んでみると、軍の方でも、統計の欺瞞ということはやってならぬことなんだということ、おさまっちゃったわけですが、そんなことがあったということ、です。

——— これが一番最後の項でございませうか、この冊子は、柴田 いやいや、そうじゃありません。もっと後にも出ています。

——— しかし、著作年譜の昭和18年の項には載っていませんが。

柴田 載せなかったかもしれません。隠蔽したわけ。(笑)

——— 国富と国民所得というのを、先生は15年ごろまで

おやりでございましたか。

柴田 やりました。

—— いま、私が専門にしておりますのが国民所得です。
柴田 私の統計概念は、水谷一雄だとか森田優三なんかと違うんです。森田も水谷も、一言でいうと、大量を観察するのが統計学である、こういう考えなんです。私は、大量的に観察するんだ、大量をそのまま観察するんじゃないんです。ですから、与えられた資料ですぐ統計をやるというのは、水谷や森田の場合ですが、大量的に観察するというので、調査のところから始まるんです。

だから、物価指数論なんてやったのは、どういう物価をそこへ集めるかということから統計意識が出なくちゃいかぬのです。それには大量観察という大教法則です。これは、いろいろと論じた論文もありますけれども、大教法則に基づく観念で選ぶわけですね。だから、私は物価指数については、私の意見なんかいったってしょうがないんだけれども……。

—— 千スカという先生は、その方法論？

柴田 そうです。やはりドイツ人ですから。カール・フォン・千スカはポーランドなんです。本来はポーランドで、ドイツ人じゃないんです。それが、若い時分からドイツへ行きました、ハンブルクの統計局長みたいなことをやっています、その傍ら、ハンブルク大学のドクメントをやっています。それで私が手紙書いたら、ぜひ来いというので、私行ったんですが、大河内なんかも行ったりで、リッパな人だったです。

—— 「スタティスティック」という非常に理論的な本がありますね。

柴田 あれがドイツ流の、つまり、マイヤーから続いてきている1つのドイツの正統的な流れなんです。

大体、戦前、というよりは、統計学会ができるまでの間、昭和7年に学会誌の第1号が出ていますから、統計学会ができたのは昭和6年ですね。昭和5年に私は外国から帰ってきたんです。そうしたら、船の中へ東京から、前から知っておった統計官の森数樹という人がいまして、それから電報が来まして、東京で国際統計会議をやるから、それにぜひ出席するよというあれだったんです。

ところが、あれは船の中ですから、どこで受け取ったかよく知りませんが、とにかく手渡されたのが、まだ黎明会に入る前だったと思います。どう電報打っていいのかわからぬし、船に乗って神戸に入ってきてしまったので、ここでいろいろな用事が出てきてしまって手も足も出ないくらい忙しくて、そのために、国際統計会議には出席できなかつたんです。それが第1回です。——京大でやりました国際統計協会の学会でございますか。

柴田 東京でやったのです。

——東京でやって、京大へ来たのはその流れが来て、財部先生なんか来て……。

柴田 東京でやったんです。それは出ることができなかつたんですが、しかしそれは、学会出発の動機になったんです。

それで私は、東京に家族全部落ちついていましたから、東京へ帰っている間に、上田貞治郎さん、高野岩三郎さん、それから私の先生の藤本幸太郎という人が、品川にある柳沢伯爵のところで集まることになったから、それ

に出ないかということを出ていったら、学会の話なんです。その発端は高野岩三郎さん、これが大体いい出しっぱらしいんです。それに有沢も乗るし、それから、中山がいつから加わったか知りませんが、使い走りに森田優三が加わりまして、大体藤本章太郎さんと上田貞治郎さんがトップの仕事をして、でき上がったんです。私もまだまだ使い走りをやっておりました。

—— そのときの記念写真に先生が載っていますね。楽友会館でお写しになった、あの記念写真だったと思いますけれども。

柴田 その学会ができてから一定の方向が築かれたんですが、学会の当初は、ほとんど社会経済統計ばかりです。

数学的な方法論といっても、私は方法論やりましたけれども、いわゆる理論的な意味の方法論でメソドロジーをやったんで、数学から出た人というのは、ああいうのに乗ってこなかった。そういう意味もあるんでしょう。

この統計のところは（関大に寄贈された統計学関係蔵書リストの）19ページから後に載っていますけれども、統計というのは、早稲田大学の小林新君、それから郡菊之助なんかのものも、呉文聡さんのものも全部、社会経済統計です。

ただ、森数樹さんが統計官だったんですから、数理的なものは少し掲げておりますけれども、いまから考えると、ごく幼稚なものです。

それから、同志社の宗藤圭三君、これも社会的な統計学です。

それから、京都大学の蜷川虎三君、『統計学研究』というけれども、数理的なものはないんです。

(リストの) 22ページのところの小倉金之助、統計数字を扱ったのは、これがたった1冊なんです。自分たちは、これを土台にして勉強したんです。

—— 水谷先生にはどういうのがございましたか。

柴田 水谷君は、統計学のこと書くのはずっと後でね。ここに掲げてあるでしょう。

—— 統計学は論理学の一種であるという、あれですね。

柴田 水谷は、ここに書いてありますとおり、これは昭和25年ですから、戦後なんです。

水谷とぼくとは因縁がありまして、知っている人は別ですが、もともと私が統計学でもって留学したんですが、その後、景気論をやれというので景気論をやりました。水谷君が、私より一橋終わったのが2年下なんです。神戸商大へ来まして、その間統計学をやっておられたんです。帰ってきて働こうとしないんで、私は経済統計というのを新たに設けてもらいまして、経済統計と景気論の講座を持つということになったわけなんです。それがずっと戦前いっぱいなんです。

水谷君のも相当数学的にはなっています。けれども、いま現在若い人たちがやっているような水準までにはいってないです。この人は、数学を京都大学でやったんですが、もっと数理的なことをやってもらいたいと思うんです。

ことに経済からいきますと、数理をやりましたが、中山伊知郎だとか、ああいう連中の数理統計見てもわかりのとおり、つまり、平べったいものになっちゃうんですよ。立体的な研究ということがなかなかできないんです。

その逆に数学の方からいった人もいます。たとえば京都大学では、後に大阪市大へ行ったんじゃないかな、何といったか、医学統計の講義をやっておったのがいます。市大だったか、和歌山だったか、どちらだったかな、もう亡くなったかもしれませんが、統計の方の論文なんかは書いていませんけれども、いい研究をしていたですね。—— 私どもでは豊崎総さんですね。

柴田 豊崎さんのあれもよく知っています。

—— 先生より少しお若い……。

柴田 ええ、若いです。4年くらい若いんじゃないですかね。

—— 豊崎先生が助教授で統計学を、戦前は、ずっと全期間やっておられたんですね。それで、しばらくおやめになっておられて京大へ行ったんです。

柴田 そんなふうに、学会のできる前は、数理的なものといったらば、小倉金之助さんの研究だけです。

大体、統計学なんていう名前くっつけたのは日本だけです。あとはエレメンツ、あるいはプリンシプルがついている。それから、統計学の「学」というのは「エレ」の意味だろうと思うんですけども、そんなものもありませんし、日本では統計学。経済のあれが出てくると経済統計学といっちゃうし、経営が問題になってくれば経営統計学ということにしてしまって、みんな「学」という字をつけますけれどもね。

大体、統計の全般としたら理論はありますけれども、また、各部門だって理論ないことはないですけれども、しかし、それはむしろ経済統計ならば、経済理論に属する部分です。

そんなふうで、ほとんど、社会あるいは経済統計。社会統計では、支配的なのは人口統計です。人口統計については、明治の時代から政府が扱っている重要なあれですから、その専門の統計官としてガッチリと仕事をやってみたわけなんです。

そのほか、農林省でも統計を出していますし、それから、商工省の方でも統計出していますけど、それは現実にあられた現象の数字を発表するんです。それをいじくって、何かそこから抽象して理論を築き上げるということ、それがいわゆる社会統計、経済統計の任務になるわけですけども、それは書物にするよりは、論文として発表されたものにはいいのがあります。

—— 昭和10年前後では、「工業統計論」とか、そういった分野でまともな本としては、珍しいですね。先生のご本（『外国貿易統計論』のこと）が出たあたりに、統計学全集でしょうか、中川友長の『国富及国民所得』とか、森田優三の『物価指数の理論と実際』だとか、水谷良一の「労働統計論」、そのあたりが出ましたが、労働統計関係の外では工業。農業の方は欠けていた。

柴田 大体、数学的な研究の問題は、すべて平均からの拡大と見ればいいでしょうね。だから、物価指数なんかが問題になってくるんです。

物価指数については、これも私、前に、一橋大学の卒業論文なんですけど、「一般物価の速度としての物価指数」、これは皆、平均をいじくり回しているでしょう。これは目的は、単にたくさんの物価の群の中から、最も典型的なものを選ぶのが、物価指数としたらば最終目的なんです。

それをやる場合に、いまは大分物価指数も変わってしまいましたけれども、当時、ロンドンの物価指数は22品目です。ところが、アメリカでは三百何十品目という、労働統計上の物価指数があるでしょう。これを2つ対比してみるんです。そうすると、片方のアメリカのやつはいわゆる大数法則に基づいて、うんと選べば平均に近づくというあれから300種類、後に600種類ぐらいまでなっちゃいましたようです。

ところが英国のやつは、品目の中から石油ならば石油を選ぶ。そうすると、それに関連の商品を省いていいという形なんです。だから、代表的な品目を選んでやるわけなんです。これが、2つの対決した主義だったわけなんです。いずれも平均から来ているんです。

だから、平均論からいけば、大数法則的にたくさんものを集めてしまって、それでその中から平均をとって選べば、一番安定した数が得られるということです。片方の英国流にいきますと、本当の代表的な商品を選んでそれを平均するとしても、結果は大した違いはないというところから来ているんです。

そんな点が研究の動機でして、それで私が最初に書いたのは「生計費指数」というやつで一番古いんですが、これは大正11年ですから、大学生のときに書いたんです。それを藤本幸太郎さんが拾って『国民経済雑誌』に載せてくれたんです。

—— 神戸の雑誌に載せることもできましたんですか、昔は。

柴田 『国民経済雑誌』というのは、一橋と神戸との共同の雑誌なんです。東京の代表が福田徳三さん、それか

ら神戸は津村秀松さんが代表で、両方でもって講義してもらったんです。

—— 神戸はもう大学でございましたか。

柴田 いえいえ、まだまだ。一橋が大正9年、それから、神戸は昭和4年。

—— ジャ、一橋だけだったんですね、その当時は。

柴田 それで、生計費指数となりますと、これは本当に平均しないといかぬということなんです。厳に家計簿から研究しろ、家計簿の平均をとって、その中で、各家庭ではこれだという代表が選ばれます。

実際、私その計算をやったんです。それは、『婦人世界』という雑誌がありましたか、何だかそういうところで毎月各家計簿の公表が3つ4つ載るんです。ずっと1年間ぐらいのやつを集めまして、それでどういう品物が使われているかということをやって、指数の形を試しにつくってみたんです。これには本当に算術平均でもってやらなきゃいかぬ。ほかの幾何平均だとか、フィッシャーの理想算式、あんなもの使ったって、現実のあれなんだから、意味はないというんです。

ところが、一般物価指数というのは、私のは貨幣価値のことなんです。貨幣価値を測定するということになると、これはいわゆる算術的なものじゃない、何でもいいというんです。一番代表的な、類型的な、典型的な数字が選ばれれば、いかなる方法でもいい。だから、今月は幾何平均でやる、来月は今度は算術平均を選ぶのが適当であったといえ、いろいろ別々にやったって構わない。何も統一する必要はない、代表法を選ぶんだから、こういう考えなんです。だから、いわゆるモードとかメ

ディーンの考え方です。つまり、一番山になっているところを選べばいいんだからというんです。

それならば、むしろそんな山がなくてバラバラのときにはどうなるか。米の値段も鉄の値段も、もうこんなになっちゃって、どこにも決まらない。それは、物価指数を選ぶのが間違いだといったんです。そんなときに代表的な価格を選ぼうという考え方が間違っている、代表はないんだ。こういうのはきわめて平穏な時期に、経済的に平穏無事なときに出てくる現象だから、そう大して問題にならない、こういうことなんです。

それが物価指数に対する考え方だったし、また、平均に対する考え方なんです。それが論文「一般物価の測度としての物価指数」というので、自分のことをいうとちよっとおかしいんですけれども、大分評価されたんです。これは『商学研究』に出してくれました。これはまだ私の学生時代です。いろんな研究をやりました。

それから、その次に載せてある「数学上の大数法則と統計学の一般的仮説としての大数法則」、これは高田保馬さんとの論争なんです。高田さんが『大数法則論』というのを書いたんです。

—— 本で出ておりますね。

柴田 書物で出ておったんです。それを批判したのがこれなんです。

高田さんという人は非常に謙虚な人ですから、長い手紙をよこして、あれは文としてはあなたぐらいの年齢のときに書いたものだ、若い時分に書いたものなんで反省している点もあるけれども、日本に紹介したという意味で理解してもらいたい、あなたのは理論的には非常に傾

聴するところがあるから、といったような手紙なんです。そんなふうだから、これに対する反論とかいうようなことはしませんからということでした。

あの方は私の近所に住んでおったんです。私は東中野で、あの方は中野なんです。結婚して2~3年たったぐらいでしたかね。お美しい奥さんで、それを目がけて行く学生もいましたし、私も2~3回出かけていきました。—— そのころはどこへお勤めだったんですか、高田先生は。

柴田 一橋です。当時の東京商科大学の社会学です。高田先生は広島からこっち来たんです。三浦新七という、この人は私の先生みたいな格ですが、引っぱってきたんです。

—— 社会学の講義……？

柴田 社会学の講義だったです。マッキーバーという人のあれを土台にしてやって、そいつを私が教室でぶちまけたんです、あれの翻訳だって。(笑)

—— アメリカ社会学がそのころ入ってきたのを先取りされたわけですね。

柴田 おもしろい先生ですからね。

—— こんなごつい本を……。

柴田 よくまあ書けますよ。大体社会学の人というのは、何でもないことをたくさん書けるもんですね。(笑) 建部遯吾さんがそうでしょう、こんな大きな本を。よく書くことがあると思って。

—— 経済学でもこんな大部のものが5冊くらいございますよね。

柴田 それだけよく本を読むということでしょうか。

それから、私のこれごらんになるとわかりますけれども、私は、統計学に関する教科書的なものは一つも書いてない。私は書かない、きらいなんです。やはり論文を主としてやるのがわれわれ学者の役目であるということ、教科書は書かない。ところが、うまくひっかかって一つだけ書いたんです。大阪市大におられた平岡健太郎氏と共著。ここにあります31年の山川出版社、これ1冊だけです、教科書的なものを書いたのは。

—— ばくもテキストは書かないつもりでいたんですけど、いまはそうはいかぬですね。500～600人を相手に……。柴田 私も関大ではそれで押し通したんです。必修科目じゃないです。選択科目にもかかわらず500～600人、もう試験にまいっちゃうんです。とっていいかげんなことはできない性分ですから、採点に10日くらいかかります。

—— 先生がお若い時代には、アメリカの統計学の影響というのは、どういう形で始まっておりましたでしょうか。

柴田 私が学生時代に勉強しましたのはボーレイです。

—— イギリスですね。

柴田 それから、ゲオルク・フォン・マイヤー、これは大部なものです。これは非常に悩まされましたです。しかし、一生懸命読んでみると、大したこと書いてないんです。

—— アメリカでいいますと、ミルズ、それからキングですね。

柴田 もっと後に出た人です。

—— もうちょっと後ですか。

柴田 むしろセークリストかな。セークリストというのがおりましたでしょう、あれなんかがやってみましたし、著書はないけれども、統計のプロフェッサーとしてその人についておった。ハーバード大学のブラウジという人、この人は数学の人です。非常に頭脳が密な人です。

話をもとへ戻しまして、経済統計以外の統計、つまり、数理統計といいますか、その中心問題は、先ほど平均と申しましたけれども、それに必ずくっついてくるのがプロバビリティ—なんです。このプロバビリティ—を発展させていってでき上がっている統計学のモノグラフは非常にたくさんあります。

それから、経済統計以外として最も注目しなけりゃならぬのは、遺伝学の方の統計研究だったんです。これはもう統計学会どころじゃない。それ以前の1800年代に、もうすでに統計的に綿密な研究が遺伝学の方では発表されていた。それで、後に統計学でもって使っている……。

—— ノンセンスな相関係数といったものですね。

柴田 あんなのを全部、標準偏差なんかも使われて、ことにゴールトンの。そういうふうになるまでの、私が先ほど申しました調査、これが大したものです。非常にたくさんの文学者、政治家、軍人、その他の偉人の家系をさかのぼって調べて、それをつくったわけです。それが『ナチュラル・インヘリタンス』という書物です。

それが自然科学の方で、自然科学といっても人体に関する問題なんだから、一種の社会科学ですね。その方法が経済や社会の方に取り入れられたのは、なぜ遅いかということの問題があるわけですが、それはたとえば太陽黒点説、あれなんかも綿密な統計です、つくってある

のは。なかなか精密な教理を使ってやってあるし。

—— モーアの研究でございますか。

柴田 それを受け継いだのが蟋川君の「雨量説」というやつでね、おもしろいですよ。つまり、景気、不景気は雨量に関係があるというふうなことです。

—— 確かに、物価指数にしましても景気の問題にしましても、一時衰退して、またわれわれの時代になったら同じ問題で迫ってくるみたいですね。先生方の時代と私の時代はもう一世代違いますし。

柴田 ただ、昔の自由経済というのと、いまの自由経済というのは違う。昔の自由経済は本当の自由経済です。だから自由に動いて、ハーバードの景気指数であらわれるような循環がきれいに出てくるんです。金融市場と株式市場から商品市場の線が。

ところが、統制ということが行われて、つまり国家権力が経済の方へ手を伸ばし始めてから、景気というものがもうこんなになっちゃったんです。いまでもそうですが、こんな現象というのは過去にはないです。物価は高い。ところが、金はあふれちゃっている。こんな現象というものは、従来の経済学の知識では理解できないところです、統制経済というのは。いまのは人工的につくった経済ですから。それはそれで一つの研究の分野にはなりますがね。

—— 本当に同じ問題がそのまま再現しているようでございまして、先生がお書きになりましたものを見ておきますと、昭和の初めにお書きになりました景気の問題、いわゆる物価指数の問題もそうでしょうけれども。

柴田 ハーバードの景気指数に、向こう行ってから私、

首を突っ込みまして、大体これが目的で、一番最初は出かけていったんですから。パーソンズは当時はもうニューヨークへ行ってしまって、ニューヨークのギャランティー・トラスト・カンパニーの頭取でね。

—— 「景気指数」は、原本が私のところにございます。
柴田 そうですか。

数理統計についての考えをいいますと、統計数理的な研究ができ始めたのは、つまり数理だけで統計学と名づけるようになった、こういうことです。それはもう戦後のことです。今度の戦争の後のことです。

学会で若い人たちが、ことに数学出身の人たちが、盛んにいろいろの研究で、私らとても追隨できないような論文を発表されています。この間、森さんに会ったときも、もうだめだなというから、だめだも何も、オレたちはもう隠居しているんじゃないかという話をしたんです。

ただ、統計学の日本における開拓者といいますか、これにはわれわれ後輩として敬意を表さなきゃならぬと思うんです。たとえば吳文聡さんとか、それから、横山雅男さんだとか柳沢伯爵、つまり柳沢保恵です。それから……。

—— 高野先生はもう少し後になりますか。

柴田 高野さんは統計専門じゃないですから。傍らやっておったんです。ちょうど高野さんと京都の財部静治さんと、非常によく似通っています、統計の関連においては。

—— 高野さんの方が財部さんよりも10ぐらいお年は上のようなのですね。

柴田 そうですかね。

—— 調べてみましたら、そのぐらいの関係におありのようでした。大橋隆憲先生は、財部先生にお習いになったんですか。

—— 僕は、財部さんの最後のときに助手やっていて、葬式の手伝いやらされた。

柴田 おもしろい人なんだ。私は「おじいちゃん、おじいちゃん」と陰で呼んでたんですけども、お酒に関しては手に負えなかったですね。はしごどころの騒ぎじゃないですわ。いつまでたっただって先がないんだから。しかし、統計学それ自身に寄与したという人ではないんです。

高野岩三郎さんもそうです。大内さんも同じです。それから有沢広己、これも統計学の方に全面的に力を注いだという人じゃない、専門じゃないんです。

それから、数理的に誘導したんでは、先輩としては統計官であった森数樹さん、これが若いわれわれ学生に対しては、いろいろ示唆を与えてくれたですね。そのほかに小倉金之助さん。私、中学が小倉商業だったですから、数学は非常に弱いんです。神戸は、商業出身と中学出身とを別々に試験したりしましたが、一橋は試験が一緒なんです。そのために数学覚えなきゃならぬということで、当時市ヶ谷にあった物理学校へ通ったんです。そのときに、小倉金之助さんがまだ若くて、この人に私は代数を教わったんです。約1年ぐらいですか、教わりました。

—— 物理学校におられたんですか。

柴田 校長さんみたいなものです、小倉金之助さんは。

—— それから大阪にいらっしやいましたね、小倉金之助さんは。

—— 阪大だったですね。

柴田 自分の中学の学生時代の話ですから、明治……。

—— 大正の初め。

柴田 欧州戦争の始まったくらいの年です。一橋に入学したのが大正6年ですから、欧州戦争の終わったのが大正7年でしょう。

この人の書物はよかったですね、当時の水準としたら。いまから見れば、数学を使うのはきわめて実用的です。

—— しかし、普通の数学者のお書きになった本とは、一味も二味も違うんですね。社会意識が本の中に盛り込まれておりました、私なんか、ずいぶん趣きが違うんですね。感心したですね。

柴田 代数を教わったんです。因数分解で非常に苦しんだんです。(笑)

しかし、戦前までは数理的な統計学というものは、各大学ではまだ発展していなかった。全部が社会的、経済的あるいは統計理論といったようなものです。私も、いまの神戸商科大学、もとの県立神戸高商、垂水にありますね、あそこで統計学をやりました。そのときには数理的なことも半分ぐらいはやりました。あと半分は理論だったです。

理論のことになると、やっぱりドイツです。ドイツ人というのは、数理の方面は余り得意じゃないんじゃないかと思う節があります、英米人に比べますと。やはり理論的なものがいいんでしょうね。しかし、実用に関する限り、ドイツ人は数理を使うんです。

フランス人なんていうのは哲学的です。数理哲学的な方面ですね。だから統計の方には余り足を踏み込んでな

いです。人口統計の方では、相当功績を挙げていますけどね。

とにかく統計というものが、われわれ学者の間に入ってきたのは、人口統計が最初です。

—— 藤本先生の本でも、後半の大部分は人口統計ですね。

柴田 そうですね、最初のやつは。この『経済統計』という清水書院から出した本は、学生時代ですけども、私が書いたんです。『経済叢書』の第4巻。その後の千倉書房から出た『統計学』、これは私は知らないです。

統計そのものは、私扱ったことないんです、論文で。皆、応用です。これ（著作リスト）をごらんになればわかりますけれども、とにかく統計出身だから、どうしても研究が統計的になるんですね。

—— 貿易統計の方へお移りになりましたのは、これは要請でございませうか。

柴田 いや、そうじゃないです。

—— 先生ご自身の問題意識……？

柴田 というよりは、当時神戸高商で貿易やっている人はいないんですよ。

—— 先生の貿易指数の問題は、同じ時期のお仕事だと思っただけですけども、そういうのは一時はやりでございました。はやりとっては大変悪いですけども、経済の他の問題で時系列的な取り扱いという動きがありましたたでしょうか。

柴田 統計学としては、書物としたら、そう珍重すべきようなものは出ていません。ただ、論文はすぐれたものが出ています。戦後はどうしても教科書的になるんです。

ことに、昔、統計学なんていう講座置いてある大学は、非常に少なかった、まれだった。戦後は、今度は高等学校で統計学を課するという意味で、みんなこぞって統計学という名前でやってるんですね。

—— いま大学の設置基準の中に統計学がどうしても入ってきますね。置かないとだめになっちゃっている。

柴田 でも、社会が望むような統計学を講義しているかどうかということは問題です。

—— 大変耳が痛いです。なかなかむずかしい。

—— でも、先生が一番初めに統計学を勉強されました時期は、きわめて希少価値がおありだったんでしよう。それは直接的には、どういうご動機でございましたでしょうか。

柴田 私は大学の本科の時代から、統計的な研究というやつは興味あったんです。

ところが、大学生になってから、統計というものを藤本先生が講義しているだけでしよう。出てみたらおもしろくないんです、つまらないんです。自分の先生をそんなこといっちゃ悪いけれども、あれはつまらないんです。だから、何とかこれをおもしろくできないかということが、まず最初だったんです。もうちょっとおもしろくできないか、もうちょっとチャーミングなサイエンスにならないか、こういうことです。

それで、統計学をやってみたんです。ゼミの学生は3人だったです。こいつ（氏名不詳、伊達(?)）はドイツ協会へ行きました。それから郡菊之助と私の3人です。

—— 先輩の方はいらっしゃいますか。

柴田 いないです。それはもう東京帝大、京都帝大だっ

ていやしません。それを専攻した人というのは、統計学で飯を食おうなんということは、ちょっと考えられませんかからな。

—— 伊達さんという人はどういう人でした。

柴田 伊達というのはドイツ語がよくできた天才でした。ドイツじゅうの統計の書物読んでいましたが、それがだんだん脱線していつてしまって、ずいぶん変わった人間です、これは。

—— 独協って、ドイツ協会の学校？ それ以前にあそこ出られて……？

柴田 いえ、そうじゃないです。ずっと一橋で、学校は普通の、地方から来たんですよ。

—— 一橋をご卒業になって、そちらの方へ就職されたわけですか。

柴田 就職は最初は、どこだったか、ちょっとど忘れしましたが、どこかの研究所に入ったんです。

—— 独逸協会中学校っていいましたでしょう、昔は。独協の中学と、それから暁星。暁星はフランス語、独協の方がドイツ語、こういうことだったんですね。

—— その先生をなさっていらっしゃったわけですか。

柴田 最後は、です。それまで方々歩いたです。

—— 統計学はお習いになったわけですね。

柴田 そうなんです。人間は非常に変わっている人間なんです。文士みたいななかっこうしちやって、慶応ボーイみたいな様子のあれです。

それから、何か話すことなかったかな。

—— ちょっと、学校の時代に戻ります。

中山伊知郎さん、それからその年配の、これの先生も

やはり藤本先生？

柴田 いや、違います。中山伊知郎は福田徳三さんの弟子です。福田徳三の助手をやっておったんです。

—— 統計学を一時一橋でお持ちになるか、あるいは外国へ行かしてもらえるような……。

柴田 なったかもしれませんよ。数理経済があれですから。

—— 何かで読みました。

—— 郡菊之助先生のお話をしてくださいますか。

柴田 郡菊之助は、弁天小僧という名前がついておるんだけど、藤本さんについたときが一緒なんです。プロゼミナール。それ以前にもう1年あるわけです。それは別だったんです。

それで一緒にやっています、モソモソした男で、いまでもモソモソしていますが、きわめていい人間で、あんなにいい人間はいないです。決して人の先に立つようなことはしませんで、おとなしい人なんですけれども、ときどき思いがけないことをやらかすんです。統計学やっていますけれども、これは甘いんです。もっと公開的に研究やればいいんですけれども、統計の研究というのは非常に骨が折れるんです。どうしても助手が必要です。いい助手がやっぱり周りにいませんと、研究できないんです。ところが、名古屋高商あたりじゃ、なかなかそういうことはできないんです。

私はもちろん幸いでして、家本秀太郎って、これがいつも、私の助教授時代から、細かい仕事でも何でもやってくれるし、たとえば税関へ行って、これを調べてこい、あるいは倉庫へ行ってこれを集めてこいといえ、もう

やってくれますし、そういうのがいました。さらに、家本の下でやるやつが一緒くたになって、私の研究を助けてくれたんです。

—— それともう一つ、藤本先生に学んでおられたころなんですが、日本の統計学会の現状みたいなもの、もう一つは数理統計2つの入ってきた時代の背景と一緒に、蜷川先生のことなどもちょっとお話聞かしていただきたいんです。

柴田 蜷川君とはずっと縁がないな。

あの方の書いたのでちょっと目を引くのは、さっきいった天体に関する統計的研究、これは外国の書物を引用しての研究ですが、つまり、太陽黒点説と雨量説といったようなものを並べて研究した人なんです。小さな書物ですけども、これは当時非常に目を引いたですね。

それから、いまでこそ政治家になっちゃって、方々へ行って頭下げてるまいことやっているらしいけれども、京都大学の人というのは大体腰が低いんです。河上肇先生でも、われわれ縁のない者がお会いすれば、実に丁重な言葉でやってくれたです。東京の福田徳三さんとは大違いです。福田徳三さんというのは、けんもほろろもない人です。

それから、神戸さんも実に丁重な人。大体、京都大学の人といったら、温厚で丁重という印象が私にはあります。田辺さんがそうだし、皆そういう感じみたいです。

ところが東京の連中は、東京大学もそうだし、一橋もそうですが、大体ぶっさばうのが多いです。蜷川さんなんかは初めから相当腰の低い方で、だれとでも愛きょうよくやる方だったんですけども、統計学会なんかの

報告でも、何を報告したんだっただけかな。印象からいうと、もっと大胆に報告したらよかろうなと思ったようなことがありました。それだけが印象に残っています。

—— 統計学会以外で、その当時何か、いまでいう経済統計研究会みたいな、有志の集まりのようなものはございましたか。

柴田 なかったですね。

—— 皆、神戸は神戸、京都は京都ということでは……。

柴田 ほかの問題ですね。外国貿易の研究会とか、それから国際経済の研究会とか、そういうものについては、学会としてではなく、個人的な集まりとしてのあれがありました。

—— 大阪の大原社研は、そういうところでまとまりの役目を果たしませんでしたか。

柴田 関係なかったですね。

—— 勝手にやっりましたんですか、高野さんのところで。

柴田 高野さんが人を集めてきてやったということはありません。けれどもそれは、各大学とは直接には関係なかったですね。あるいは個人的に、社会問題研究所から委託研究を受けた人はいるかもしれませんが。私は知りませんがね。

—— そこへ参加された統計学者で、個人のお名前の若干はわかります、いま伝記が出ておりますから。

柴田 そうですか。私の知っている範囲ではないですね。あるいはと思われるのは、統計的研究ではなくて社会的な研究として、もう死にました一橋の杉本（栄一）が関係したきりです。ぼくより2つ下ですが、非常な勉

強家だったです。やっぱりコロッと死んじゃったらしい。

杉本は私らと一緒にして、一緒の場所に住んでおったんです。三浦先生、それから杉本、山口茂、村松、それから私。これは東中野のところにたむろしてまして、ほとんど毎日のように顔を合わしていたんです。石神井の方ではなくて、東中野から落合の方。大体たむろしておったのは上落合というところで、それでみんなてんてんに来るんです。朝、飯が済んだころになると、だれかがやってくるんです。ほかの連中は、われわれに中野学派だなんていうニックネームをつけましたけれども、大体同じ傾向だったですね。

—— ドイツへいらっしやいましたときは、どなたとご一緒にございましたか。

柴田 いえ、一人。私は日本の旅行でも内地の旅行でもそうですし、海外へ行く場合でもいつも一人です。一緒に行くのはかなわぬです。たまたま向こうで、ハンブルクからロンドンへひとつ行こうじゃないかというんで、正金銀行のやつと一緒に行ったことがあるんですけども、まいっちゃったです。

—— 蜷川先生とご一緒にころじゃございませんでしたか、ドイツにいらっしやいましたのは。

柴田 そうじゃないです。蜷川君の方がちょっと先ですね。

私らが行ったのは、中山伊知郎、東畑(精一)、それから京都大学の人では研究所の何といったかな、その連中がベルリンにたむろしてました。みんな夜になると集まっているらしかったです。私はハンブルクだったんです。

—— キールの有名な研究所は、あれはお勉強なされませんでしたか。

柴田 行ったんです。あそこには大分長くいました。ホテル・ベレー・ビューという森の中に下宿しまして、6〜7カ月もいましたかな。あそこのベルトヴィルツシャフツ・インスティチュートにいました。私が行ったときはホームズというのが所長でしたが、そこに籍を置いたわけじゃないんです。アメリカでかぶって来たほこりを落とそうというんで、キールが一番よかろうと考えて、キールへ行ったんです。森がいいですからね。

—— 先にアメリカでございますか。

柴田 アメリカです。

—— それからヨーロッパへ行かれたんですね。

柴田 いまの留学と違いました、とにかく向こうの学生として腰を据えちゃって、何年でもそこにいるんですから。私ら、向こうの生活に溶け込んでしまって、近所に火事があったときには飛んで行って、私は江戸っ子なもんだから、ポンプを手伝ったりしたこともありました。
(笑)

そうかと思うと、小学校から招待されて、日本人珍しいものだから、一種の東洋人の見本みたいに思ったんでしょう。子供たちの前へ立たされて、何かしゃべろというんで、弱ったことがありました。長くいると、そういうことになるんです。

—— 統計学に関係ないと思うんですけれども、第1次世界大戦のときに、日本で、船成金が物すごく儲かった時期がありましたね。ぼくは知らないんで、人に聞いたんですけれども、あのときに漫画のエピソードで、船成

金がカフェーに入って、停電したときに、ふところから砂糖を出して燃やしたというのを聞いたんですが、そのような……。

柴田 それは本当に漫画だけのことでしょうね。実際にはそんなことはやりやしません。つまり、成金というのは大体ケチなんです。成金の下で、金をもらったやつがぜいたくをするんです。それでなければ、たとえば船成金といったらば、第1に桑原、勝田、そのほか、その後国会議員になったのなんかいます。

ただ、いまから考えると、儲け高というやつは途方もないものなんです。だって、1日のきょうの相場なんだから、あしたになると運賃がその倍になる。

それから用船料なんかも、想像もできないくらい3倍、4倍の値段になるんです。だから、船を買って、あるいは借りて、それを又貸しするんです。それでなければ大儲けできやしませんよ、1そう自分で持っているのでは、こっちからこっちへやるんです。いまの三光汽船みたいなものです。みんな又貸しで金を儲けるんです。

第1次大戦のときなんていうと、とにかく船がないんだから。今度の戦争でもそうです。ほとんど全部が借り上げられている。

私が書いた中で、海軍の軍令部から頼まれてつくったやつがあるんです。昭和15年だったかな。「船体と船価との関係」というやつがどこかにあるはずですよ。

—— 「船体と船価」ですか。

柴田 戦前ですから、昭和15年までの間ですね。昭和7～8年ですね。日本の商船がポカポカ沈められるんで、補償しなきゃならないんです。それをどのくらい補償し

たらよろしいかというんで、ひとつ標準的なものをつくってくれというんです。国の仕事なんだからというんでそれを引き受けまして、古船、中古船について、船の年齢と価格との比較をずっと相関線をつくったんです。

それで、それを提出したんですが、そうしたら、向こうから海軍関係に発表されたものを見ると、たとえばこういうふうになっておったとするでしょう。そうすると、その上へ引いてしまったわけです。それで私は怒ったんです。科学的に出した線を、そんな勝手なことをしたら困るからということ、抗議文を出したことがありました。どこかにそれがあはずです。英文ではなく、和文で出した。戦争真っ最中のときだったですから。あるいは全部じゃない、落ちているかもしれません。これは大体半分ぐらいしか載せてないです。

—— 先生が終戦後、神戸市の経済局長をおやりになりましたときは、神戸大学ではもうお教えにはなりませんでしたか。

柴田 講師で行ったです。非常勤講師です。

—— ついでに先生に聞きたいんですけども、ぼくは戦前の失業のとき遭っているんです。それで、失業者の活動が起こってききましたのは昭和の最初ですね。そのとき、たとえば大阪でいえば、天王寺の公会堂で失業者の大会が行われました。そのときの神戸の川崎造船所の失業者とか労働者の動き、どうなんですか、あのときの……

柴田 さあね、いつですって？

—— 昭和3年ごろです。一番不景気のとき。日本に金融恐慌が起きてから。

柴田 つまり、そのときには、今日と違って労働争議と

いったんですが、労働争議の一番大きいのは川崎だったんです。川崎のあれで、松方がピシヤンとなっちゃったんです。

—— 川崎って……？

柴田 川崎造船。

—— 3回に分けて解雇されている。3500人から1万4000人。

柴田 大変な騒ぎだったんです。当時はもうとにかく完全なる権力政治、権力経済だったんですから、自由経済ではあるけれども、それは経済人のいうことであって、経済人は自由に行動したけれども、労働者でも何でも、官僚さえも、今日のような勝手なことはできなかつたんです。

われわれも、昭和何年でしたかな、不景気だというんで減俸されたんです。外国から帰ってきてからしばらくです。昭和6年ぐらいに減俸されました。政府もクビを大分切ったんです。官僚、官吏の人数を減らしたんです。

—— 昭和4年の合理化政策が出てからですね。

柴田 よかったのは昭和4年です。米ドルに対するあれが2円20～2円30銭まで上がったんですから、われわれ非常にアメリカに対しても、裕福になった感じを持っています。だから、日本は非常によかったわけなんです。

それで、金解禁をやったわけです。金解禁やったところが、ドカッと世界恐慌の連続です。1929年から1930年です。

—— 神戸はダメージが大きかったですね。鈴木商店の問題もありますし。

柴田 さっき読んだのはそれなんです。そのときのやつ

です。まずアメリカから起こったんですから、世界大恐慌になります。

—— やはりそのときは、経済の中心は関東よりも関西の-----。

柴田 それはそうなんです。それに似通ったことを私書いているんです。かなり前ですが、これ、たしかラジオで放送したんです。「東京・大阪両都市の経済的特徴」というやつです。これを話したんです。

つまり、大阪の方がいかに経済に対して敏感であるかということなんです。株価の動き、その他の物価の動きとかいうことについて、東京の方はより鈍感だということが、この経済的特徴の1つの問題だったんです。

—— いまは敏感になりまして、東京もおもしろに押えつけられて、どうにもなりませんですね。権力の中央集中で-----。

柴田 中央集権ですね。

—— 経済は鋭敏だと思いますけれども、騒いでみても-----。

柴田 あらゆるところで、いまになってくると、あがきのとれない不自由さを経済人は感じているわけです。

—— 戦前はそんなようにごぞいましたか、大阪というのは経済的に。

柴田 それはそうです。大阪商人というやつは、というより大阪経済人というやつは、中央から次官だとか大臣がやってくるでしょう。そうすると、「ハーツ」ってやって帰しておいて、後ろ向いて舌出しているんです。官僚のいうことは聞かないんです。それが、大阪の経済人の経済人たるゆえんなんでね。いまでも少しは残っています

けどね。

—— もう一つ、よろしゅうございますか。

柴田 当時の人口統計の研究というのは、どのような方が……
柴田 人口統計の研究書は多かったですね。一番よく研究されているのはさっきいった、森教樹さんの『人口統計論』。

—— 改造社版『経済学全集』に出ておりましたですね。それもあつし、『統計学全集』にも出ておられますね。

柴田 ところが、統計は統計で、統計学者だけけれども、数学から来に統計学の人ですから、もうひとつ足を踏み込んで、つまり、社会現象的にそれを見ていくということはしないんです。むしろ高野岩三郎さんなんかの方が、人口の問題としては深く扱っているんです。

—— 岡崎文規博士は。

柴田 あれは友人ですが、もう亡くなりました。彦根高商の教授をやっている、その後、人口問題研究所長かなんかやったんです。

—— 終戦後、そうでした。

柴田 あの人、人口はずいぶんやりました。ことに、人口動態問題なんというのはいろいろやっていたんです。統計学というものは、大体人口統計に絡んだものが多いです。外国でもそうです。

—— 主力は人口統計学から出ていますね。私どもの時代になりますと、それが逆転いたしまして、経済統計学が主流になりまして……。

柴田 経済の大学ですから、当然のことです。

—— 学会の主流もそういうふうになりまして……。

—— いまは、今度は経済統計が多少凋落してまいりま

して、社会統計がまた復活いたしました。上部構造の研究を盛んに、むずかしいんですけども。

柴田 私も社会統計については余り手をつけませんでしたけれども、「児童自殺に関する統計的考察」、大正15年に書いた長い論文なんです。いろいろな外国の資料から児童自殺の問題に関する、当時、社会問題にはまだ余り今日のようなぐあいには騒いではおりませんでしたけれども、大体15歳未満の子供がなぜ自殺するかということのあれです。

—— その研究は、もっぱら大原社研が一手引き受けのような状態でございましたか、昭和の初めごろ。私はよく知りませんけれども。

柴田 そうかもしれません。

—— あそこは社会政策と労働運動研究と統計学の古典的な面がミックスされて。

柴田 それは、高野岩三郎さんがそういう人なんです。全面的にぶちまけるわけでしょう。

—— もうちょっと時代が遅くなるんですけども、塚原仁という方がおりましたですね。

柴田 塚原仁、私の後輩です。藤本さんの研究室だったんです。

—— 専門は。

柴田 塚原君という人は統計の方なんですけど、藤本さんには2つの流儀がある。1つは海上保険、1つは統計学、これがあるんです。海上保険の弟子もいますし、統計学の方も弟子がいるんです。

統計学の方は、私が大学の第1回ですから最初で、その次に1人いて、2年目になってふえにんです。森田優

三 なんか皆そうです。私より2年下のゼミナール行っていたんです。森田だとか、そのほか全部で5人ぐらいいましたか。

—— 当時は、先生のお若いころは、いわば帝大系の学者と商大系の学者と、何か、同類意識でけんかをされたことございませんか。

柴田 あれはもう始終です。

—— やはり商大とか帝大とか。商大系統ですと、一橋お出になった方ですね。それと東京だとか京都だとか、勇ましいのがお若いころにいらっしゃったと思うんですけれども。

柴田 一番顕著だったのは、河上さんと福田さんの論争ですね。ずいぶん長く続きましたからね。

—— 統計学の方野ではどういう……。

柴田 統計学ではないです。統計学では、あつたとすれば、森田優三と僕とのあれでしょう。

—— 商大系ばかりだったから。

柴田 弟子と弟子との間柄だから、問題ないですけれども、統計学では論争の余地というのは、理論的には統計理論としてあり得ますけれども、それも余り聞いたことないですね。

統計学会に最近出たことないから、どうなっているか知りませんが、昔はそう論争はなかったです。批判ぐらいはありましたが、批判の中で恐らく一番皮肉な批判をしておったのは私なんかじゃないかと思うんです。森田の研究だったのですが、この特性が余りうまいことでき過ぎていたんです。何か理論からはみ出したものが、そこへ加わっているんじゃないかと質問して、

森田がカンカンになったことがありましたが、そういう批判はあります。

—— 郡さんと蜷川さんが大きなけんかをされたことは論文にごさいますね。蜷川の「経済統計論の性質に関する一考察」という論文をめぐって。

柴田 蜷川君はけんかするだろうけれども、郡君は余りけんかする柄じゃないですから。

—— 郡さんが批判されていた。昭和の初めごろだったかな。

—— 昭和4年あたり。蜷川さんが船で向こうへ出かけるときですね。船の中で何か書いた論文だそうですから。(パリで執筆)

—— 戦後、先生が神戸大学へお帰りになりましたからは、統計学は家本先生にお引き継ぎに……。

柴田 家本じゃないです、水谷一雄。私の経済統計を家本が継いでいる。

—— 水谷さんは何を。

柴田 統計学です。

—— 神戸も2本立てでございましたか。

柴田 私は、経済統計と景気論をやりました、経済統計は家本に継がせたわけです。

—— それで聞きたいんですけども、第1次世界大戦のときに日本の船価、日本は船をつくりたい、しかし、アメリカから鉄が輸入できないでしょう。そのときに鉄と船価との交換率というのが出たでしょう。あのときの貿易統計の造船の価格は。

柴田 とにかくくず鉄、ほとんどくず鉄ばかりだったです。船ばかりじゃなくて、大砲だろうが何だろうがくず

鉄。どこの港へ行ってもくず鉄の山だったんです。くず鉄というのは、くず鉄として持ってきたもの、それから船がくず鉄になるといふのとある。

くず鉄になったときのあれを、私の曲線では最低のところへ持って行って、それから線を引いたんです。どのくらいだったか、具体的なことは記憶ありませんけれども、論文を見れば出ていると思うんです。ここには載ってませんが、「船齢と船価との相関関係」という論文があります。これでは落ちているようです。大正13年以後です。

—— それから、もう一つよろしゅうございますか。

先生が大正12年に書かれた論文で「人口学説史考」といふのがございますね。当時もうすでに「人口学」という言葉は、一般に使われるようになっておったんでしょうか。

柴田 使っていたかもわからぬし、でも、むしろここでは人口の学説という意味です。人口の学説史。前のジェームス・スチュアートの論文があるでしょう。それから、とにかくマルサスだとか、フランスにおける人口のだんだん減退していく状態。フランスの当時のそれは、世界的な問題だったんです。それらについて書かれたいろいろなものから書いたんです。

—— 先生がドイツへ行っていらっしやいましたころは、まだかなりいい本を自由にお買いになることはできましたか。

柴田 こっちでは入らなかったでしょう。統計学というものが、それほど学者の関心、ないし学校で講義でも盛んにやっていたら、学生が買うと思いますけれども、神田

なんかでも統計学の本はまだそんなに出てなかったです。だから私はこっちは、学生時代に統計学の書物を買った記憶が余りないです。

—— ドイツじゃ、かなり市場に出ておりましたですか。
柴田 そうですね。ただ、ドイツの統計学というのは余り数理を使わない、理論的なものが多いですし、そういうものですから。

—— ここに載っております、たとえばヨーンの本ですか、カウフマンは全部同じようなものですね。これはドイツで、当時は簡単にお買いになれましたですか。

柴田 全部買ったです。この中で、最も代表的なドイツの統計学としたら、ジージェクの本です。これが一番、読んだところ……。

—— 読みごたえがしますね。

—— 理論的にもガッチリしていますね。

—— 最後に1つ。

『統計学全集』が若干出まして、中断いたしました。中川友長の『国民所得と国富』ですとか、森数樹の『人口統計』とか、ああいう企画というのは、いまから見ましたら、ずいぶん大胆不敵な企画だと思えますけれども、いまは『統計学全集』というのは出てませんものね。それは、そういう1つの昭和10年ごろの現象としては、何かそういう要求があったと申しますか、学者が皆一致協力したといえますか、何か……。

柴田 やはりプロモーターがあったんでしよう。私のそれは、統計学とは関係のない経済の方の叢書だったですけれども、プロモーターは大内兵衛さんあたりじゃないかな。

しかし、ああいうものを出すと、大体本屋はつぶれるんです。同文館と同じです。

—— いまから見れば、ちょっとね。いまのように学生がたくさんおれば、また何とかかんとかいて買わせることもできるかもしれませんが、当時は恐らく大学じゃないと、ほとんど統計学というようなものはやりませんでしたでしょう。高商の統計なんというのは、まだ相当ちゃちなものだったと思います。

柴田 戦後私の書いた『自由港の研究』というのがあるんですが、あれは同文館から出したんですが、あんな人が余り読んでくれないようなものを出版したら、本屋は大体だめです、つぶれます。それを勇敢にやってくれたことに感謝はしています。

—— 同文館は、現在の同文館でございましょうか。

柴田 破産したんです。第1次破産があって、それは三省堂に吸収されて、三省堂は同文館のすぐ前だったんですが、三省堂も同文館も資本主は一緒だったんじゃないかと思うんですけれども、第2次の同文館ができて、それは私の友人が支配人格で入り込んで、勃興させました。

—— 長時間いろいろと有益なお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。